

「こども時間」
を届ける
ク リ ニ ク ラ ウ ン
臨床道化師

瞬間を生きる子どもたち

塚原成幸 日本クリニクラウン協会・編





大人が笑えば、子どもも笑う



子どもの「生きる力」を育むことがクリニクラウンのねがい



赤い鼻を見てこぼれる笑顔



母と子の心をつなぐクリニクラウン



クリクラウンは今、ここにいる子どもの存在を大切にす

はじめに 子どもと向き合いながら考えてきたこと

私はこれまで20年間道化師として子どもと関わりながら、表現活動を通じて私なりの主張やメッセージを投げかけてきました。その経験の中で、子どもに接するときの配慮として心がけてきたことがいくつもあります。

追い詰めない

幼少時代、私はたくさん大人の大人からいろいろな質問を受けてきました。当時私は、子どもながらに「どうして大人は矢継ぎ早に質問をしてくるのだろう」と、大人の言動に対して不満を感じていました。

その中でも、「お父さんとお母さんはどっちが好き？」「一番好きな食べ物は何？」「将来の夢は何？」の質問は、特に答えることが苦痛だった質問でした。

その理由として、父親と母親のどちらが好きかと聞かれても、片方を好きといえばもう片方に対して申し訳ない気になるし、一番好きな食べ物と聞かれても、カレーライスとアイスクリームの優劣なんて即答できるものではなかったからです。また、夢



を聞かれて、もし仮に「空を飛びたい」と答えても、大抵、大人の返答は「空を飛ぶならパイロットだね」でした。職業以外にも夢があってもいいのに、どうして夢は職業になってしまふのだろう……。私は自分の価値観で画一的な回答を押しつけてくる大人たちの意見に対して、大いなる疑問を抱いていたのです。

このような経験から、子どもと関わる時には、子どもを精神的、身体的に追い詰めない工夫をしたいと思ってきました。どのような子どもでも、自由が利かなくなれば息がつまるし、視界が閉ざされれば不安感情を抱くようになります。また、自分の意見を伝える機会に恵まれなければ強く反発したくなるからです。

嘘をつかない

私は以前より、舞台の上演を行うという形で子どもと対面してきました。また、近年は臨床道化師（クリニクラウン）として各地の病院を訪問し、様々な病気を持つ子どもと関わり合いを持つ毎日を過ごしています。

こういった生活の中で感じてきたのは、子どもには嘘をつけないということです。子どもは社会経験が少なく論理的な思考判断は得意としないと思われがちですが、それをはるかに凌駕する「直感力」と繊細な「感性」を兼ね備えています。子どもに嘘をつくことは、子どもとの関係を悪化させるだけの、百害あって一利なしだと思ってきました。

しかし、だからといって、子どもの置かれている状態を無視して何でも開示すれば、物事が解決するというわけでもありません。伝えるべきことは伝えますが、その情報によって子どもがどんな気持ちになるか、常に注意する必要があります。良質な「コミュニケーション」の中で、子どもとの信頼関係をどのように築いていくかを、私たち大人や援助者は、いつも考慮する必要があります。

信頼感を育むためには相手をはぐらかさないことが重要で、むしろ虚偽そのものが大きな損失だと捉えるべきだと思います。

真剣に臨む

子どもは遊びを好むが故に、ふざけた関わりを好むと思いきや、意外と多いのではないのでしょうか。

しかし、ジョークやパロディーに代表されるブラックユーモアは、圧倒的に大人が好む思考、行為であって、子どもにとっては、そのユーモア一つで傷つくことはよくあることです。子どもは未知のことをその場で理解する能力が高く、その機会も多いと言えます。いわば、常に真剣に物事と対峙し、精一杯「今」を生きているのです。

だから、大人だからといって余裕を見せて関わるのは、子どもに対して失礼だと言えないでしょうか。むしろ、子どもであるからこそ、真剣に向き合って、本気で共に過ごす時間や経験を大切にすべきだと考えます。

近年、「子どもの気持ちが変わらない」という言葉を、子どもをめぐる臨床現場や教育現場、地域社会で耳にします。

子どもの気持ちが変わらないということは、時代や世代間の感覚の違いが決定的な理由ではありません。決してあきらめたりしない粘り強い臨床実践では、子どもの声を全身で受け止め、円滑な対話を実現させることが可能であることを、私たちは身を持って実感してきました。

冒頭から大胆な意見になりましたが、「追い詰めない」「嘘をつかない」「真剣に臨む」ということが、現代社会の人間関係において、良質なコミュニケーションを築くキーワードだと思っています。

人と人のつながりが希薄になっている昨今、現実的には多くの人々が深い心の絆を求めています。

「道化師は、傷ついた人間関係を修復させ、一人ひとりの生きる力を高めるために行動する」。これは、私自身が20年間貫いてきた仕事観であり倫理観です。また、それを具体化させるために、道化師は、笑いやユーモアという人間特有のコミュニケーション技術を駆使するのだと思います。笑いやユーモアは、緊張の高まりを解消し、恐怖・敵意・怒り・苛立ちといった感情を緩和させる効果があります。つまりユーモアのあるコミュニケーションは、人と人をつなぎ、生きることへのモチベーション（動機づけ）を高めるのです。

「笑顔は人を幸せにする」、そのことに気づかせてくれたのは、今までの道化師人生の中で出会った観客の一人ひとりだったり、出会った子どもたちだと思っています。

この度、『こども時間』を届ける臨床道化師^{クリニックラウン}の瞬間を生きる子どもたち』を発刊するにあたり、日々、小児医療の世界で子どもの命と向き合っている医師や病棟保育士、患者家族、そしてクリニックラウンたちの語りを辿りながら、あらためて、子どもと出会うときに心がけてきた思いが間違いではなかったことに気がつくことができました。

本書を通じて、生きにくさの中に身を置きながらも懸命に瞬間（今）を生き抜く子どもたちの現実が伝わることを祈っています。

2010年9月2日（5回目）のクリニックラウンの日

塚原成幸

子どもと向き合いながら考えてきたこと 塚原成幸 5

笑顔は人を幸せにする 臨床道化師とは

臨床道化師ってなに？ 14

クリニックラウンの役割とは？ 16

クリニックラウンの効果は？ 18

クリニックラウンの基本スタンス 20

クリニックラウンの病院訪問 一日の流れ 22

日本クリニックラウン協会の活動紹介 25

訪問の様子／訪問病棟の特徴／クリニックラウンの養成／講演会やワークショップについて

インタビュー◎塚原成幸

すべての子どもに「子ども時間」を 日本クリニックラウン協会設立から5年間の歩み 30

子どもの「生」と「死」をめぐる現場から 小児医療チームと臨床道化師

「子ども理解」への深い眼差し 62

*発達援助者の声

今を生きる子どもの支えになる 小児科医師 木野 稔 64

子どもの本当の姿を伝えるために 病棟保育士 青木理恵 82

クリニックラウンは人と人をつなぐ架け橋 クリニックラウン 中野朋恵 96

本来の「育ちの場」を取り戻す試み クリニックラウン 佐々木舞 110

*家族の思い

発達援助支援の新しい体制づくりを 笠井功治・千晴さん 聞き手・塚原成幸 126

レットノースデイ〜一人人の笑顔大作戦 144

笑顔は 人を幸せにする

クリニックラウン
臨床道化師とは



share the time for kids with all children



● これからの小児医療のありがた 細谷亮太×塚原成幸

語ることなく逝ってしまふ子どもの思いを伝えていきたい

対談を終えて 塚原成幸

163 146

「クリニックラウンの日」2010年 出逢えてよかった」

166

日本クリニックラウン協会5周年にあたって

特定非営利活動法人「日本クリニックラウン協会」理事長 河 敬世

170

あとがきにかえて 笑わせ上手ではなく、笑い上手な人生を生きたい 塚原成幸

172